

2013年度日本福祉文化学会震災支援交流現場セミナー
「気仙沼大島の暮らしと地域文化の復興を語り合う交流セミナー」報告書



期日 2013年8月31日(土) 9月1日(日)

会場 気仙沼大島「明海荘」・「おぢやのみ工房」・「仮設住宅」

関西ブロック 岡村 ヒロ子

【1日目】

開会にあたり、島田副会長が被災地大島における現在の生活の実情を理解し、今後、日本福祉文化学会が継続してできることは何かを考える場としたいという今回の交流現場セミナーの目的と、ご出席いただいた大島の方々への感謝の言葉を述べた。さらに、9月に「暮らしの中の福祉文化を問い直す」というテーマで開催される全国東京大会の紹介があった。



1. 「大島と気仙沼を往復して島民のいのちと生活を支えた『ひまわり号』の活動」

ひまわり号船長 菅原 進さん

壮絶に尽きる。船を助けるには沖に出るしかない、そう判断した菅原さんはエンジン全開で操縦、津波と戦った。流れてきた2軒の家が船尾にぶつかり、波の力で船は島に直角に押し上げられたという。前から後ろから津波が襲ってくる。波と平行になったら間違いなく転覆する。船内に入ってきた水を掻き出しながらの操縦だ、きっと人間の力を超えていたに違いない。仲間の船が数隻、無残に転覆していくのが目に入った。一つ操縦を間違ったら菅原さんも『ひまわり号』諸とも海にのまれてしまう。菅原さんは『ひまわり号』を励まし続けたという。『ひまわり号』は海に翻弄されたのではない、菅原さんが海を、船を熟知していたからこそ、その勇姿が今、あるのだ、そう確信する。海が落ち着いた頃、一帯が明るくなっていることに気づき、よもや火の海になっているとはつゆ知らず、えらく早く街灯がついたなと思い込んでいたようだ。



首のない死体や足がもがれた死体を数体、引き上げ、陸に運んだこと、そこは凄まじい死臭が漂い、居合わせた人々も思わず顔をそむけるような場と化したと切々と話して下さった。

気仙沼に働きに出ていた大島の人々、そして島の人々はフェリーが津波で陸に打ち揚げられてしまったため、完全に孤立していた。菅原さんは翌々日から『ひまわり号』を出し、島民や物資をピストン運行して、島の生活を支え続けた。まさに島民の方々の命をつないだ“勇気ある海の男”である。

家も海水につかり、住めなくなった。一枚一枚の板を何度も何度も真水で洗い、塩気を抜く作業を一年間、続けたという。なかなか塩気は抜けない、気の遠くなるようなことをし続ける、『ひまわり号』しかり、我家を愛おしく思う菅原さんの姿に胸が熱くなった。なんでもかんでも一緒くたにもっていってしまうがれき収集車に菅原さんは思わず叫んだ、「待ってくれ。そのサッシ、持っていくな」と。サッシはまだ使える、自分が家を建てるには必要な物、ただでさえ物がないのに無造作に持っていくなという心底からの怒りだろう。あとは家を建てるだけだが、再建に対しては市の援助が全くないという。辛いことはまだまだ続く。

2. 「おぢゃのみ工房活動の1年と暮らしを支える女性たちのネットワーク」

おぢゃのみ工房 子輝葉（つばき）代表 白幡 まさえさん

「おぢゃのみ工房」の活動を始めて1年8ヶ月。当初は誰ひとり口を開かず、ただ黙々と針を運ぶだけだった。とても重苦しい雰囲気だったという。お母さんが元気になることで生活環境も変化する。白幡さんは「急ぐのではなく、ゆっくり呼吸をしながら・・・、を心がけています。ここに花が咲いていると気付くようになりました。余裕が生まれると生活の流れが変わってきました」と静かな口調でお話なさる。白幡さんご自身、被災なさっているのに、こうしていきいきとリーダーを務めていらっしゃる・・・。



2012年1月、赤い羽根助成金を受け、80cmも瓦礫で埋もれた「明海荘」の女将さん・子どもさんの住まいを提供していただき、皆の力を結集して改修し、スタートさせたのが「おぢゃのみ工房 子輝葉（つばき）」である。敷地内には「明海荘」のご主人が設計し、立教大学の学生ボランティアの手で造った石窯が輝いていた。



「おぢゃのみ工房 子輝葉（つばき）」スタート時は、ニュースレター、チラシづくり、手づくり教室、大島の伝承・津波体験を聞くお話し会、子どもたちの勉強部屋提供、ピザパーティ等々に取り組んだ。働く場・悩みを話し合う場を得た女性達にとって、「おぢゃのみ工房」は自分の居場所となり、どれ程、元気を取り戻したことだろう。その後、自立に向け、販売できるものを作って資金づくりをしようという気運が生まれ、京都地域創造基金の助成を受け、商品開発に取り組んだ。商品は

大島の特性を生かすもの、暮らしに根付くもの、例えば“大島一円で家に飾られている吊るし飾り”“浮き玉ストラップ”“椿の花のストラップ”“女性が慶弔時に持つ小さめの手提げ袋”等々、着実に商品を誕生させた。京都地域創造基金助成が終了した現在は、内閣府の事業を受託した団体の募集した東北イニシアチブ起業コンペティションに応募して気仙沼市エリアで採択され、今後も手づくり品の製作と販売を続けるという。

ここに至るまでには、材料の調達や商品のデザイン等々、書面には到底書ききれないほどのご苦労があったと思う。それを次へのステップになさった皆さんのエネルギーはきっと大きく実を結ぶに違いない。



3. 「震災前の暮らしをとりもどすということ

—気仙沼漁協婦人部の活動と仮設住宅の生活のこれから—

仮設住宅自治会代表・気仙沼漁協婦人部会長 畠山 悦子さん

一見、気丈そうな畠山さん。長年、人を束ねる役職に就いてきたからだろうか存在感が大きい。そんな畠山さんだが津波に家を流され、次男さんを亡くし、生きる希望をすっかり失ってしまい、一時は真剣に島を捨てる覚悟をしたという。波に流された家は引き波でなんと元の場所に戻ってきたというから驚きである。数年前に友達からいただいた花は毎年、それまで以上に見事に真っ赤な花を咲かせている。次男さんをどうしても働いていたところから見送ってやりたいという気持ちから自力でかさ上げをした。県からの補助金はゼロ。「自分でやれ」ということだろう。行政は全くあてにならないと憤慨する畠山さんだ。



(菅原さんも同じように発言なさっていた) 生きる力を失いかけていた畠山さんを奮い立たせたのは全国の漁協婦人部の仲間達からの激励だった。不自由だろうからとぼんとお金を送ってくれたり、お米や洋服や暖房器具を送ってくれたり・・・。毎晩、電話をかけてくれる友達に恐縮していると「あんたの声が聞きたいから」とさりげなくいってくれたり。本当にありがたかったと・・・。きれいな洋服を着るわけにもいかず、お米も食べるに食べきれず、しばらくはお蔵入りだったと笑う。畠山さんがそれまでに丁寧に築き上げてきたからこそその人脈だろう。生活を立て直すのに、もちろんお金は必要だ。しかし、それ以上に大切なのは人の支えだと改めて教えられた。「人脈は宝」だとおっしゃる畠山さんの言葉には説得力があった。

婦人部長も後進に譲るつもりだったが請われてもうしばらく務めることになり、今でも全国を忙しく飛び回っているという。自民党本部にも顔を出し、被災地の現状を訴えたり、国政の動きや情報を入手したりと本当に頼れる会長である。私達若輩者の先達としても、ぜひとも本領発揮していただきたい。

仮設住宅自治会代表としての立場からは、仮設の最大の課題はプライバシーが守られないことをあげられた。4畳半は布団でいっぱい。おばあちゃんと夫が病いで床に伏している世帯では、奥さんは炬燵にも入れず、寒い冬を数か月、過ごしたという。そんな現状をみた畠山さんは空いている仮設に入れて欲しいと行政に掛け合ったが許可は下りなかったそうだ。今は、家を建てて出る人、そのままの人さまざままで必ずしもじっくりいっているとはいえないという。

ボランティアもありがたいが、観光気分で来ないでほしい。支援物資の中には、汚れた衣類も多く入っていた。何でも送ればいいというものではない。被災地に必要なものを送る配慮が欲しかったと敢えて苦言を呈した。

災害後、宮城県の漁業協同組合員は250人から150人に激減した。資金が乏しくなった気仙沼漁協婦人部は稚貝で作ったアクセサリーを販売して活動資金を得ているという。そのストラップはとても可愛らしいデザインだった。「夢はあわびの稚貝で作ること」と畠山さんは明るく語った。



4. 「気仙沼大島の生活のいまとこれからを展望する」

大島小学校前校長 菊田 榮四郎さん

大島は菊田さんの故郷、若い時の人口は6000人、今は2970人までに減ってしまいました。遠方に住む多くの教え子からは菊田さんは大震災ですでに亡き人と思われていたという。大島を謳った水上不二の作品を披露して下さい。



「海はいのちのみなもと
波はいのちのかがやき
大島よ
永遠にみどりの真珠であれ
水上 不二」

「(2011.3.11) 当時は前任校勤務だった。体育館は遺体安置所となり、校長の仕事はそこにご遺体のお世話だった。ご遺体を前に一人の人間としていろいろなことを感じた……。新年度から母校の大島小学校に着任し、「何かやらねば……」と思っはいたものの地区の実態を把握できない状況からスタートせざるを得なかった。立教大学のボランティアの方々が毎月、訪れ、学習支援や大島の勉強会に関わって下さった。「前を向いていきたいな」とつくづく思った。仮設から通ってくる児童は、明るくにこにこしている、しかし、4畳半の生活であることに変わりはない。

こんな大島を作りたいというクリエイティブな会『大島の未来を考える会』が立ち上がった。グループホームも考案されている、何とか、いい方向にいけばうれしい……。そう思っている」菊田先生は、将来の大島を見据え、静かな口調の中にも力強く話して下さい。

大島と気仙沼を結ぶ橋(2030年完成予定)と防潮堤の建設が計画されているという。菊田先生が立ち上げた「大島の未来を考える会」とマッチングすれば大島は間違いなく活性化していくと思った。

今年の交流会には、「おぢゃのみ工房」のスタッフの方お二人にもご参加いただいた。去年は、大島では女性が夜、家を空けることは叶わなかったとお聞きしていたので、島の方々の生活への意識も変わりつつあり、時間の過ごし方にゆとりが生まれたのではないかと肌で感じ、たいへんうれしいと磯部事務局長から率直な感想が聞かれた。



【2日目】

*パッチワークづくり；おぢゃのみ工房にて

日本福祉文化学会会員でキルト作家の長尾玲子さんの指導で美しいレースと布を重ねた巾着とヨーヨーキルトを作った。たくさんの組み合わせの中から自分の好みのものを選ぶだけでも盛り上がるのが女性。昨夜、交流会に参加して下さったこともあって、すぐに和やかな雰囲気にも包まれた。おぢゃのみ工房の方々はさすがに針の運びも滑らかであつという間に完成。とても分かりやすい説明で縫物が得意でない私もなんとか仕上げることができた。

工房の棚には、お人形や着物地で作った手提げ袋、天井からは吊るし飾り等々、数多くの作品であふれていた。売れる手づくり商品を開発した工房の女性達の実力からは生きる強さが伝わってきた。



*懇談会；仮設住宅にて

「懇談する中から大島のゆずの美味しさは格別だということがわかった。なんとか商業ベースに乗せられないものだろうか」と熱く語る島田副会長。四国のおばあちゃん達が紅葉のバック詰めで財を成した話は有名だ。ひょっとしたら「大島の美味しいゆず」が島の経済の活性化に一役買うことも夢ではない。皆さんから、ぜひお知恵を拝借したい。

【被災地の様子、そして想い】

気仙沼の町は冠水しているところが確かに減った。建物の解体が進んだのでむしろがらんとしてしまった。現場セミナー後、陸前高田を訪れたが、海岸近くに建っていた市庁舎や文化センター、ホテル等々、大きな建物が解体され、見渡す限り更地となっていた。かさ上げの土だろうか、点々ときれいに山積みされているのがなんとなく異様だった。夕食をとろうとして見つけた蕎麦屋さんも「本日終了」。何も無いのが当たり前なんだ、期待する方がおかしい。諦めかけていたら遠くにファミリーマートらしき看板。目を疑った、去年はなかった・・・。「一昨日、オープンしたんです」と店長。品揃えも実に豊富。次から次、客は絶えることがない。しかも、車を取り付けての客だ。復興工事の職人さんらしき人も品定めをしていた。地元の人々も仮設の人々も工事に携わる人々も大助かりに違いない。コンビニは現代人にとっては生活必需品だということを被災地に来て再認識した。カップラーメン・おでんの実に美味しかったこと、大満足の夕餉だった。

夜は真っ暗、車が走らなければまったく闇の世界。高台住宅建設中の立て看板が目に入った。山を切り開いての建設である。何軒ぐらい建つのだろうか。被災前、この広大な地にどれくらいの人たちが生活していたのだろう。

一年一年、被災地の様相は確実に変わっていく。2011.3.11 から2年半、復興への道のりは10年ともそれ以上ともいわれている。その道は例え遠くても前に進んでいることを実感できた。被災なさった方々にとってはきっと遅々とした歩みのだろうが・・・。

東日本大震災の被災地に足を運び、“被災地の今”を自分の五感で感じ取ること、現地の方々の話に耳を傾け、思いに寄り添うこと、それ以上の何ができるわけではない。しかし、その実情を語り継ぐことなら微力な私にもできる、今年もそんな思いで被災地を後にした。

